

翻訳唱歌の全容がつかみがたく、また一部の翻訳唱歌の考察によつて導き出された結論が一般化されているという懸念を抱く読者もいよう。

なお本書では翻訳唱歌以外の多岐にわたるテーマが論じられるが、すでに一次史料に基づく詳細な先行研究によって明らかにされている事実が新しい認識であるように論じられている部分が散見される。とりわけ第2章第2節において、プロテスタンティズムとヘルダー編の民謡集によるプロイセンの音楽教育が日本の唱歌教育に影響を与えたと論じている部分の大半は、前出の『仰げば尊し』の第十一章に示された知見の踏襲である。

また、唱歌教育の当初の対象は女性であ

り、それは当時、女性は軽薄であり幼いうちから音楽で正しく躰ける必要があると考えられたからだという結論の根拠として、

『教育雑誌』の記述から引用がなされるのだが、これは実は唱歌ではなく神教についての解説である（一四八〇—一四九ページ）。

さらに、音楽面についての十分な検証がな

いまま性急に結論が出されている箇所も看過できない。例えば『小学唱歌集』は歌詞

内容を重視して旋律が二の次だつたため、「曲と歌詞内容が合つてない曲が多い」という批判を受けがちだったが、『尋常小学唱歌』では「それを改善して音楽に合わせた歌詞を付けている」（一九七ページ）と示されない。いみじくも著者が「あ

とは示されない。いみじくも著者自身が「あとは示していい」「自分の足で史料を探したわけではない」と述べているが、本書で提起された学際的なテーマが今後さらに資料的裏付けに基づいた知見へ発展していくことを期待したい。

（おおち・ひろこ 中部大学現代教育学部准教授）

（A5判、二四六ページ、四〇七〇円、九州大出版会、一二〇一九・一二刊）

近代日本の統治権力とはいかなるものか。国民教化はどう試みられ、また可能なものだったのか。そして現在私たちはいかなる統治／教化のなかにあり、またどう生きるべきか。本書はそれらの問いを背に、明治後期の井上哲次郎、清沢満之そして監獄教師たる僧侶が、「悪」と統治にどう向きあつたかを思想史的に論じ、読者を搖さぶろうとする。

第一章「近代日本における国民道徳論の形成過程」は、井上の前半生と思想・実践を三期に分けて描き出す。明治中期に『勅

繁田真爾著

『「惡」と統治の日本近代

道徳・宗教 監獄教誨

谷川穰

語衍義¹的な国家道德、日清・日露戦間期に現象即実在論という一元的境界觀で西洋への対抗を志向した井上は、明治末期に至り國体・帝室への尊崇いかんを基準とする国民道德論を前面に押し出し、忠孝一致・万世一系の皇統という永遠不变の國体で者は単に井上を国家主義イデオローグとだけ位置づけず、「近代日本の思想史を規定する、もつとも注目すべき特質」たる二元論の超克・一元化への欲求という系譜上に置くべきことを主張する。ただし井上はその超克において人間の「惡」の問題を主題化できず、「道徳の実践可能性を信じて疑わない」オプティミストであったとする。

の腐心を論じる。焦点を合わせるのは第一次および第二次「教育と宗教の衝突」論争であり、とりわけ後者を中心に「国民道徳」のしなやかな陶冶」ぶりを動態的に描く。そして、それらの争い、対立をより深く捉えるべく、第二次論争直後に体系化された清沢の精神主義を引き合いに出す。井上の国民道徳「倫理的宗教」は「善」を本位とする常識的規範意識であり、その裏に「排他的な偽善性や権力性を」もつが、それを鋭く照射しうるのは清沢が親鸞に見出した「惡」の思想だとされ、第Ⅱ部への架橋がなされる。

井上とは異質な一つの近代的な生の態度として、第Ⅱ部「惡」と宗教——清沢満之を中心には、清沢の精神主義が国民道徳と相容れない道徳性や、現実の常識や善悪を超える主体の形成を促したことを提示する。第三章「日清戦争前後の真宗大谷派教団と「革新運動」」は、清沢の真宗大谷派革新運動の経験のなかから、その一つの表れである「精神」論をつきつめて精神主義が選び取られた過程を論じ、先行研究の「清沢」「内面主義」との批判を単純すぎる把握だと蹴する。革新運動の登場を北

「海道開拓・両岸再建事業以来の疲弊や憤懣」というより、〈地べた〉の実感に発するものと見る点、制度論と「精神」論の分岐と改革か、精神的領域に訴えるかーを見てとれる点が目を惹く。清沢は二元論のなかで搖れ動く「近代」を見据えた人物、と定位される。

第四章「清沢満之「精神主義」再考」でも引続き、精神主義＝内面／新仏教＝社会といった単純な一項対立理解に異を唱える。一見消極的な仏教をラディカルにつきつめることこそ積極的な「否定の方法」であり、有限を自覚して初めて無限への不断の実践を導くという、社会への清沢なりの実践不可能性」を感知し「悪人 凡夫の自覚」に拠る点で決定的に異なる。それが顯著に表れるのが名古屋九人斬事件（一九〇一年に発生した殺人事件）についての評言

で、罪に泣く者を責める慘たらしさでなく、罪を犯した者こそ救済すべきだと説く。清沢に、自己の「悪」へのまなざしが他者のそれを共感しリアルに把握しうる態度である、と高い評価が与えられる。

二項対立的認識を超えることをしきりに主張する著者の議論は、清沢研究史に対する苦闘という性格がやはり強い。所詮清沢擁護の書か、との見方もできなくはない。だが、監獄教誨という場を通じて清沢的思想の実践性を検証しようと試みた第Ⅲ部「刑罰と宗教—監獄教誨の歴史」に至り、議論は異なる次元へ広がる。第五章「監獄教誨」の誕生」第六章「異端的教誨師と囚人たち」で試みられるのは、監獄教誨の歴史を「真宗の事業」史から引き離したうえで、その異端的教誨師に「清沢的契機」の実践的可能性能をみる、という當為である。具体的には、囚徒の「悪」に共感を寄せた明治前期のキリスト教の教誨から、中期以降の国民道德的な語り中心の真宗僧侶の教誨へと大きくシフトし、「他者の「悪」に対する態度も不寛容になつていった」という質的転換の歴史である。

しかし著者は、そこにとどまらない教誨師も見出す。一九〇〇年前後には清沢の影響をうけた、ないし彼と共に振したとも言うべき「悪」への觀念が看取され、共感的まなざしが生まれた事例を発掘する。特に第六章では、囚徒たちの獄中記や教誨師の手記をもとに、近代的統治を照射しようと試みる。教誨の苦闘や「囚人たちの声」を集め、検討する著者の着眼もさることながら、それ自体として読み応えがあり、「悪」の思想研究がもつ奥の深さを感じさせる。

本書は監獄教誨を、国民道德の適用が最も強く要請され、ゆえに最も強くボテンシャルと矛盾が露わになる場を見る。従来の研究は、こうした場を殖民地やマイノリティ、あるいは被差別部落といった「固定的」烙印に見てきたが、「国民」の誰もが

（たにがわ ゆたか 京都大学大学院文学研究科教授）
国民道德の強制の場として位置づけて足り、としない点で説得的である。他方で清沢思想の実践性の析出手法や、書名に掲げた國家の「統治」の柔構造の把握、「天皇」の不在など課題も指摘できるが、それらは今後の展開への予告と受け止めておきたい。

（A5判、二七八ページ、五五〇〇円、法藏館、
二〇一九・七刊）

だが、監獄教誨という場を通じて清沢的思

想の実践性を検証しようと試みた第Ⅲ部

「監獄教誨」の誕生」第六章「異端的教誨師と囚人たち」で試みられるのは、監獄教誨

の歴史を「真宗の事業」史から引き離した

うえで、その異端的教誨師に「清沢的契

機」の実践的可能性能をみる、という當為である。具体的には、囚徒の「悪」に共感を

寄せた明治前期のキリスト教の教誨から、

中期以降の国民道德的な語り中心の真宗僧

侶の教誨へと大きくシフトし、「他者の「悪」に対する態度も不寛容になつていった」という質的転換の歴史である。

しかし著者は、そこにとどまらない教誨

師も見出す。一九〇〇年前後には清沢の影響をうけた、ないし彼と共に振したとも言うべき「悪」への觀念が看取され、共感的ま

なざしが生まれた事例を発掘する。特に第六章では、囚徒たちの獄中記や教誨師の手記をもとに、近代的統治を照射しようと試みる。教誨の苦闘や「囚人たちの声」を集め、検討する著者の着眼もさることながら、それ自体として読み応えがあり、「悪」の思想研究がもつ奥の深さを感じさせる。

本書は監獄教誨を、国民道德の適用が最も強く要請され、ゆえに最も強くボテン

シャルと矛盾が露わになる場を見る。従来

の研究は、こうした場を殖民地やマイノリ

ティ、あるいは被差別部落といった「固定

的」烙印に見てきたが、「国民」の誰もが

いつでもそちらへ「転落」する契機をはらむ存在』犯罪者にそれを見出そうとする点

に、本書の射程の広さを感じる。「罪」を

池田宏樹著

『戦後復興と地域社会

千葉県政と社会運動の展開

鬼嶋淳

本書は、長年にわたり近現代の千葉県政の研究を続けてきた著者が、戦後復興期の千葉県政、とくに一九五〇年代の柴田等知事時代を中心に政治・経済・社会運動と幅広い分野にわたって検討したものである。

本書は、長年にわたり近現代の千葉県政の研究を続けてきた著者が、戦後復興期の千葉県政、とくに一九五〇年代の柴田等知事時代を中心に政治・経済・社会運動と幅広い分野にわたって検討したものである。